レールモントフの物語詩『デーモン』のタマーラと バラード詩『タマーラ』の同名の主人公との関係について

Взаимосвязь между Тамарой из поэмы «Демон» и одноименной героиней из баллады «Тамара»

井上　幸義
INOUE Yukiyoshi

Поэтические произведения последнего периода творчества М. Ю. Лермонтова «Демон», «Дары Терека» и «Тамара» тесно связаны друг с другом образом реки Терека, являющимся границей между этим светом и тем светом, которым правит Демон. В поэме «Демон» на Тереке погибает Тамара от поцелуя Демона, а в стихотворении «Дары Терека» и в балладе «Тамара» Терек уносит трупы своим буйным течением. На наш взгляд, Лермонтов в балладе «Тамара» дал царице имя Тамара из шестой редакции поэмы «Демон», в которой княжна Тамара погибла от поцелуя Демона и была унесена в ад, а не из восьмой последней редакции, в которой героиня унесена в рай, и ее душа спасена. Таким образом поэт хотел в демонологическом образе царицы Тамары показать дальнейшую судьбу героини другого своего произведения – княжны Тамары. Кроме того, в «Тамаре» в пятой строфе Лермонтов скрыл анаграмму слова «сомнения», которое может сочетаться с фразой «мрачный Евнух» в последнем стихе той же строфы. И в целом, сочетание слов «мрачный Евнух» и анаграммы слова «сомнения» перекликается со словами, которые ангел бросил Демону, унося погибшую Тамару в рай: Исчезни, мрачный дух сомненья! При этом слово «Евнух», написанное автором с прописной буквы, может ассоциироваться со словом «Демон», также написанным с большой буквы.

0. はじめに

ミハイル・レールモントフ（М. Ю. Лермонтов）のバラード詩『タマーラ』（«Тамара»）（1841 年）は、グルジアの伝説に基づいて書かれ、その主人公である女王タマーラのモデルがだれかについてこれまで様々な説が唱えられてきた。本論では、女王タマーラが、それ以前にかかれた物語詩『デーモン』（«Демон»）の第 6 稿（1838 年）でデーモンの口づけによって命を落とし、地獄に行ったタマーラのその後の姿であり、バラード『タマーラ』は、物語詩『デーモン』の第 6 稿の続編であるという推論をたて、その検証を試みる [1]。

1. バラード詩『タマーラ』のタマーラ

レールモントフのバラード『タマーラ』は、作者の死の数か月前の 1841 年 5 月初めから 7 月初めにかけて執筆され、死後の 1843 年に、『祖国雑記』（Отечественные записки）第 27 巻に発表された。『タマーラ』執筆の 4 年前の 1837 年、レールモントフは『詩人の死』による逮捕、カフカスへの追放のあと、グルジア軍用道路を通ってテレク川とダリヤル峡谷を訪れ、この峡谷のスケッチを残している。バラード『タマーラ』では、この深き峡谷に聳える古城に住む、天使のごとく麗しく、デーモンのごとく邪悪な（Прекрасна как ангел небесный, Как демон коварна и зла）両義的形象をもつ女王タマーラ（царица Тамара）が、夜な夜な旅人を甘き声音で誘い、口づけを交わすと、翌朝旅人の亡骸がテレク川に投げ込まれ、テレク川はその亡骸を運び去る。そして、最後にタマーラの優しき別れの言葉が響く。この詩は、グルジアの伝説を下地として書かれたものであるが、イラクリー・アンドロニコフ（И. Андроников）によれば、1820 ～ 30 年代にグルジア軍用道路を通った旅行者たちの旅行記では、いずれもこの城は、女王ダリヤの城、または盗賊の女首領ダリヤ、あるいは魔女ダリヤの城と呼ばれていた [2]。また、フセヴォロド・メリニツキー（В. П. Мельницкий）

1　本稿は、日本ロシア文学会第 65 回全国大会（2015 年 11 月 7 日、於埼玉大学）における口頭発表に加筆したものである。
2　*Андроников И.* Лермонтов в Грузии в 1837 году. М., 1955. с. 36.

も、『1852 年のロシア遍歴』（«Переезды по России в 1852 году»）でテレク川にダリヤ女王が客人たちを投げ捨てていたという伝説に触れ、「レールモントフは、おそらくこれとは別の伝説に基づいて女王をタマーラと名付けたのだろう」としている[3]。

一方、アンドロニコフは、フランスの旅行家ガンバ（G. F. Gamba）が、その『南ロシア紀行』（Voyage dans la Russie meridionale, Paris, 1826, II, pp. 21-22）に、「現地の伝説を信じるなら、ダリヤル城は中世の時代、某公女ダリヤに属し、ダリヤは、すべての旅人から多額の謝礼金を徴収し、彼女が気に入った者は寝床をともにするために引き留め、満足できなかった情夫はテレク川に投げ捨てるよう命じていた」と記していたことを認めながら、実際にはどんな公女も、女王も、ましてや盗賊の首領も存在せず、ダリヤ（Дарья）の名前は、ダリヤル（Дарьял）から生じたものであるとして、その根拠に、ここを訪れたプーシキンの『エルズルム紀行』（Путешествие в Арзрум）第 1 章を引用している：「ダリヤルの向かい側の険しい岩の上に城塞の廃墟が見える。伝説によると、そこには某女王ダリヤが身を隠し、自分の名前をダリヤル峡谷に与えたということになっているが、これは作り話に過ぎない。古代ペルシャ語でダリヤルは門を意味するのだ」。これに続いてプーシキンは、プリニウスを引用し、この門がいわゆるコーカサス門であり、ダリヤルと呼ばれるこの谷は、実際に鉄の錠前がかけられた木製の門によって閉じられていたと記している。つまり、ダリヤ女王の名前は、ダリヤル（門）から付けられたものであって、その逆ではないということである。

アンドロニコフは、レールモントフがガンバの『旅行記』のことも、この城がダリヤの城と呼ばれていたことも知っていたはずであるとし、その根拠として、『現代の英雄』の中で、旅行記記者とマクシム・マクシームィチがクレスト山を越えるくだりでこの山が「クレスト山（あるいは、研究者のガンバが呼ぶところによれば＜ Le Mont St.-Christophe ＞）」と名指され、ガンバの著作が引用されているからであるとしている[4]。レールモントフは、ガンバの『旅行記』だけでなく、『タマーラ』執筆の 5 年前の

3　*Мельницкий В. П.* Переезды по России в 1852 году. Статья 3 // Современник. 1853, №8, отд. IV. С. 135-169.

4　*Андроников.* с. 37.

1836 年に雑誌『同時代人』の創刊号に発表されたプーシキンの『エルズルム紀行』も当然読んでいたはずである。とすれば、ダリヤ（Дарья）女王の名が、ダリヤル（Дарьял）峡谷からの類推で作られたのであって、その逆ではないこと、したがってダリヤという女王も存在しなかったことを知っていたはずである。レールモントフが自分のバラードの主人公をダリヤと名付けなかったのは、これらの事情からであろう。

では、作家が名付けたタマーラとは誰であったのか。作品が発表されて以来 1 世紀半に亘り様々なタマーラ説が提起されてきた。アンドロニコフは、12 世紀末から 13 世紀初めにかけてグルジアを統治した女王タマーラがモデルであるとしながらも、グルジアに繁栄をもたらしグルジア文化の花を咲かせた歴史的賢女王タマーラの名前に放蕩なダリヤの伝説をなぜレールモントフが結びつけたのか、いまだに謎であるとしている [5]。一方、ヴァノ・シャドゥーリ（В. С. Шадури）は、17 世紀のグルジア内乱で重要な役割を果たした別の女王タマーラがモデルである可能性を指摘し、当時ヨーロッパやロシアで広く知られていたフランスの商人ジャン・シャルダンの『黒海・コルキス経由ペルシャ・東インド旅行記』（«Journal du voyage du chevalier Chardin en Perse et aux Indes orientales par la mer Noire et par la Colchide», L., 1686）でそのタマーラの名前が言及されているとしている [6]。ボリス・エイヘンバウム（Б. М. Эйхенбаум）は、タマーラの名前は、様々な由来の伝説や口伝えが結びつけられたもので、ダリヤ女王伝説をタマーラに置き換えたのは、レールモントフではなく、フォークロアの作り手たちや伝説の語り手たちであるとしている [7]。このように、タマーラの、歴史上のあるいはフォークロア上の多くのモデル探しがなされてきたが、いまだに定説はない。従来の『タマーラ』の研究は、そのほとんどが、タマーラを実在の、あるいは伝説上の人物と結びつけようとするモデル探しに終始しており、レールモントフが、なぜ、バラード『タマーラ』（1841 年）の主人公の名前を、物語詩『デーモン』（1838 年）でデーモンの口づけによって息絶えたタマーラと同名にしたのかという疑問から分析してい

5　Там же. с. 37.
6　*Шадури В. С.* Тамара // Лермонтовская энциклопедия. М., 1981. с. 560.
7　*Лермонтов М. Ю.* Полное собрание сочинений: В 5 т., М.; Л.: Academia, 1935—1937. Т. 3. Поэмы и повести в стихах. — 1935. с. 258.

る研究は、管見の及ぶ限り、ない。『タマーラ』のタマーラが実在の人物でないとしたら、レールモントフはなぜ『デーモン』ですでに描かれたタマーラと同じ名前をこの主人公につけたのだろう。この問題を論考する前に、もうひとつのキーポイント、テレク川について考察してみよう。

2. この世とあの世の境界としてのテレク川

レールモントフの後期の３つの詩作品『デーモン』、『テレクの貢物』(Дары Терека)、『タマーラ』では、いずれもテレク川が描かれ、重要な役割を与えられている。テレク川は、グルジアからロシアを通ってカスピ海に注ぐ全長 623km の川であり、『デーモン』ではテレク川は、デーモンがタマーラを見初め、死に至らしめる場として、『テレクの貢物』では主人公として、『タマーラ』ではタマーラを助ける助演者として描かれる。これら３作品は、それぞれ舞台の場、主演、助演としての連作と見ることもでき、いずれもテレク川の悪魔的イメージという共通のイメージで結びつけられている。では、以下、それぞれ具体的に考察してみよう。

まず、『デーモン』では、テレク川に面するダリヤル峡谷は、蛇の棲み処（жилище змея）に、テレク川は吠えるメスライオン（ревущая львица）に喩えられる。デーモンはテレク川の辺でタマーラを誘惑し、情欲を吹き込み、口づけによって死に至らしめる。ロシアの民間デモノロジーでは、蛇は悪霊とされ、スラヴ神話では、炎の蛇（огненный змей）は、蛇の姿をしたデーモンであり、一方、このデーモンは、人間の風貌を与えられ、「女性に情欲を吹き込む」能力を持つ魔的な存在として呪いによって呼び寄せられる[8]。また、ライオンは、力と支配のシンボルである。

このように、『デーモン』では、ダリヤル峡谷とテレク川は、スラヴ神話の悪魔的象徴と結びついた、この世とあの世の境界というトポスを象徴していると考えられる。

次に、『テレクの貢物』では、テレク川は１人称の主人公として、カスピ海への貢物として、戦死した勇猛なカバルダ人や若いコサック娘の亡骸をカスピ海に運び入れ、献上する。コサック娘を献上されると、それまでまどろんでいたカスピ海は、喜色満面はしゃぎ出す。陰鬱で重い雰囲気の

8　Славянская мифология: энциклопедический словарь. М., 1995. с. 283-284.

『デーモン』とは対照的な陽気で明朗なトーンである。

Я привёз тебе гостинец!	オレはお前に運んできたぞ手土産を！
То гостинец не простой:	そんじょそこらの手土産じゃない：
С поля битвы кабардинец,	戦に倒れたカバルダ人だ、
Кабардинец удалой.	勇猛果敢なカバルダ人だ。
(...)	
Я примчу к тебе с волнами	オレはお前に運んで来よう波に乗せ
Труп казачки молодой,	若きコサック娘の亡骸を
(...)	
Он взыграл, веселья полный	カスピ海は喜色満面はしゃぎ出し
И в объятия свои	しっかり抱えるように
Набегающие волны	押し寄せる波を
Принял с ропотом любви.	愛をつぶやき受け止めた。

最後に『タマーラ』では、女王タマーラは、テレク川のほとり、ダリヤル峡谷に聳える古城に住み、タマーラの甘き声音に呼び寄せられた旅人たちは、タマーラと口づけを交わし、一夜を共にするが翌朝は亡骸となってテレク川に流される。旅人たちは、この世から、境界であるテレク川を通ってタマーラの住むあの世（地獄）へ送られてしまう。スラヴ神話では、川は、「対岸にある別世界への道」、あるいは「この世とあの世の境界」という意味を与えられ、また、時間の流れ、永遠性また忘却を象徴するとされている[9]。『タマーラ』の女王タマーラも、あの世の古城に住み、この世の旅人たちをあの世という別世界に連れ去り、最後に優しき別れの言葉をなげかける。この詩に描かれるできごとはことごとく不完了体によって叙述されているが、このことも女王タマーラの行為が永遠に反復され、「閉じた円環」をなしていることを示唆している。この永遠性は、不死という永遠性を与えられそこから抜け出すことができないデーモンに通ずる。

このように、『デーモン』、『テレクの貢物』、『タマーラ』のいずれにお

9　Там же. с. 333.

いても、テレク川は、死者を運び、この世とあの世を結ぶ境界としてのトポスとして描かれ、悪魔的イメージを付与されている。それぞれ舞台の場、主役、助演をなすこれら連作の 3 作品は、詩作法から見ると、基本的に弱強格の 4 脚ヤンブの女男交差脚韻で書かれる『デーモン』に対し、正反対のイメージの『テレク川の貢物』は強弱格の 4 脚ホレイの女男交差脚韻、一方『タマーラ』は弱強弱格の 3 脚アンフィブラーヒィの女男交差脚韻と、それぞれ異なるリズム形式を与えられている。また、『タマーラ』では、女王タマーラそのものがデーモンの分身的な存在として描かれている。この女王タマーラと、『デーモン』においてデーモンの口づけの毒によって死に至った罪びとタマーラ妃は、共通のデーモン的イメージを刻印された分身的存在である。以下、このふたりを比較考察してみよう。

3. バラード『タマーラ』の女王タマーラと物語詩『デーモン』のタマーラ

3. 1. ふたりのタマーラ

『タマーラ』では、第 1 連で描かれたテレク川に面するダリヤル峡谷に立つ古城を受けて、第 2 連では、そこに住む女王タマーラが描かれる。

В той башне высокой и тесной	高やかにして狭きその塔に
Царица Тамара жила:	女王タマーラが住んでいた：
Прекрасна как ангел небесный,	天上の天使のごとく麗しく、
Как демон коварна и зла.	デーモンのごとく邪悪なり。

ここで注目すべきは第 2 詩行の Царица Тамара жила という語順である。第 1 詩行の場所の状況語 В той башне высокой и тесной（高やかにして狭きその塔に）を受けて、中立語順なら、そのあと主語が後置され жила царица Тамара（女王タマーラが住んでいた）と続くはずである。もちろん、これは第 2 詩行の жила と第 4 詩行の зла で脚韻を踏ませるための倒置でもあるが、詩作法でよく用いられる定語と名詞の倒置などと比べ統語論にかかわる倒置語順は特別な意味をもつ。クヴャトコフスキー（А. П. Квятковский）は、詩作法における統語論的倒置法（синтаксическая инверсия）は急激なイントネーションの変化をもたらし、その変化は詩行

にさらに大きな表現力を与えるとしている[10]。ここでは、царица Тамара（女王タマーラ）はレーマとして述語動詞 жила（住んでいた）に先行し、意味論的にもイントネーション上も特に強調され、読者の耳は、強調された「女王タマーラ」に引き寄せられる。ここで連想されるのは、『タマーラ』以前に詩人によって書かれた物語詩『デーモン』における同名のタマーラ妃であろう。タマーラ姫が、その死後葬られたのは、コイシャウル峡谷に立つ「岩山の廃墟と化した古城（教会）」であったが、一方、『タマーラ』の女王タマーラが住むのも、岩山の古城であった。さらに、女王タマーラの「天上の天使のごとく麗しく」「デーモンのごとく邪悪な」両義性は、『デーモン』で花婿を失いながらデーモンの言葉に惑わされ、口づけによって死する、グダールの娘タマーラの両義性を連想させる。というのは、第 2 部第 8 章でデーモンに対峙しタマーラを守ろうとする天使ケルヴィムは「麗しき罪びとの守護者」（хранитель грешницы прекрасной）と呼ばれるからである。つまり、タマーラは「麗しき罪びと」という両義的な存在として描かれているのである。また、レールモントフがバフメーテフ夫人ヴァルヴァラ・ロプヒナー（Лопухина В. А.）に献呈した『デーモン』の第 6 稿のいわゆる『ロプヒナー写本』（лопухинская копия）の第 2 部には、「デーモンが炎の吐息でタマーラの心を汚した」というくだりがある（ただし、最終稿で一般的に定本とされている第 8 稿ではこの箇所は削除された。なお、第 6 稿と第 8 稿の違いについては後述する）。

Но Демон огненным дыханьем	だがデーモンは炎の吐息で
Тамары душу запятнал	タマーラの心を汚した

さらに、『デーモン』の第 6 稿では、後に「神に関するタマーラとデーモンの問答」（диалог Тамары и Демона о Боге）と呼ばれことになる問答のなかで、デーモンはタマーラを地獄に連れて行くと宣言する（第 8 稿ではこの問答は削除される。これについては後述する）。

10 *Квятковский А. П.* Поэтический словарь. Изд. 3-е, испр. и доп. М., 2013. с. 176-177.

Тамара	タマーラ
А наказанье, муки ада?	では、罰は、地獄の苦しみは？
Демон	デーモン
Так что ж? Ты будешь там со мной!	それがどうした？お前はオレと地獄に行くのだ。

しかし、この時点では罪びとタマーラはまだデーモン的な存在ではない。その後デーモンの口づけによってその毒がタマーラの体中に浸透したとき、デーモンの悪しき心も刻印されることになる。第 6 稿には、タマーラの死後、棺に横たわるタマーラの悲しき微笑に宿るデーモンのごとき、運命への嘲笑、疑いの心や天との誇りに満ちた反目が示唆されている。

第 6 稿、第 8 稿ともに：（デーモンの侮辱のくだり）

И всё, что пред собой он видел,	デーモンは、目にするものをことごとく
Он презирал иль ненавидел.	侮蔑しては憎しんでいた。

第 6 稿：（タマーラの微笑に宿る侮辱のくだり）

Печальный смысл улыбки той:	その微笑の悲しき意味は：
Что в ней? Насмешка ль над судьбой,	そこには何が？運命への嘲笑か、
Непобедимое ль сомненье?	抑えがたき疑いか？
Иль к жизни хладное презренье?	あるいは生への冷たき侮蔑か？
Иль с небом гордая вражда?	あるいは天との誇りに満ちた反目か？

さらに、上述のように、『タマーラ』はことごとく不完了体によって叙述され、女王タマーラの反復的行為の永遠性が「閉じた円環」として描かれているが、『デーモン』でも、タマーラにデーモンが愛の代償として永遠性を約束している。

第 6 稿、第 8 稿ともに：

Твоей любви я жду, как дара,	お前の愛を賜物のように待っている、
И вечность дам тебе за миг;	束の間に代え与えようお前に永遠を

このように、『タマーラ』の女王タマーラと『デーモン』の死せるタマーラ、とりわけ第 6 稿に描かれるタマーラは、ともにデーモンの分身的存在のイメージを刻印されている。詩人のマヤコフスキーは、1924 年に詩『タマーラとデーモン』（«Тамара и Демон»）で、このふたりのタマーラの特質をひとつに結合したが [11]、それは、彼が、このふたりをあくまで別人と捉えていることを意味している。しかし、以上から推測されるのは、『タマーラ』の女王タマーラは、『デーモン』のタマーラその人のその後の姿であり、『タマーラ』は『デーモン』の続編を成すものであるということである。

3. 2. 『タマーラ』に見られるアナグラム

この 2 作品の関係という意味で興味深いのは、『タマーラ』の第 5 連である。ここで、女王タマーラの声音に誘われて城にやってくる旅人を出迎えるのは、ハーレムの宦官（Евнух）である。

На голос невидимой пери	見えざりし女神の声音に誘われて
Шел воин, купец и пастух:	来るのは戦士、商人、はたまた牧夫。
Пред ним отворялися двери,	旅人の前に扉が開かれる
Встречал его мрачный Евну́х.	迎えるは陰鬱なりし宦官ひとり。

しかし、女王が住む古城に宦官は不自然である。ハーレムは、本来男子禁制の女性の居室であり、去勢された宦官はハーレムの女性たちの監視役であり、外部からの男性の侵入を防ぐ役割も果たしていた。一方『タマーラ』では男たちが女王に隷属し、宦官が女王に仕えるという逆転の構図がとられている。同時代の先輩プーシキンの作品には、『バフチサライの泉』（Бахчисарайский фонтан）など宦官が数多く登場するが、いずれも本来の

11 *Григорьев В. П., Колодяжная Л. И., Шестакова Л. Л.* Собственное имя в русской поэзии XX века. М., 2005. с. 375.

ハーレムの女性たちの監視役としてである。詩的メタファーとはいえ、なぜレールモントフは宦官(Евнух)という語を使ったのであろうか。ここで、注目すべきは、第5連の最終行の「陰鬱なりし宦官」(мрачный Евну́х) という表現である。この表現は、『デーモン』の第8稿で、天使がタマーラの魂を天国に連れ行こうとするときにデーモンに投げかける言葉「消え失せよ、陰鬱なりし疑いの霊よ」(Исчезни, мрачный дух сомненья) を連想させる。さらに、第5連の子音・母音を分析してみると、語尾のьとиの表記上の違いはあるが、第4詩行と第5詩行の2詩行にかけて「疑いの」(сомнения) のアナグラムを見出すことができる。

第4詩行：Пр**е**д **н**и**м** отв**о**рял**и**с**я** двер**и**,
　　5　4　3　　2　　18　　7
第5詩行：Встречал его мрачный Ев**н**у́х.
　　6

сомнения のそれぞれの文字に番号を振り分けてみれば、第4詩行を右から左へ、1 (с)-2 (о)-3 (м)-4 (н)-5 (е) と繋がり、第5詩行の Евну́х の 6 (н) を経由して、第4詩行の最後から 7 (и)-8 (я) に至り、сомнения のアナグラムが「閉じた円環」として完結している。さらに、第4詩行の двери の д と第5詩行の Евну́х の у́х も ду́х のアナグラムをなしているように見える。この組み合わせは次のように図示することができる。

Е
в　　д
сомнения　　Евну́х
у́
х

この図で、сомнения は Евну́х と交差し、Евну́х は дух と交差する。これは、『デーモン』第8稿の мрачный дух сомненья そのものである。つまり、この Евну́х は Демон そのものではないかという推論が成り立つ。しかし、レールモントフは、そもそもアナグラムという手法を他の作品でも使って

いるのだろうか。ミハイル・ガスパーロフ（М. Л. Гаспаров）は、レールモントフのアナグラムの例として、『断崖』（Утёс）の第 2 連の стоит の子音反復、『荒涼たる北にポツンと』«На севере диком стоит одиноко…» の第 1 連の сосна、第 2 連の прекрасная の他に、『最後の新居』（Последнее новоселье）(1840 ～ 41 年) から興味深い例を挙げている。『最後の新居』は、亡骸となってパリに帰還したナポレオンを主人公としながら、テキストにはその名が一切言及されないという謎めいた詩だが、そのタイトルにアナグラムが込められているという [12]。ガスパーロフは具体的にどのように込められているかについて触れていないが、ナポレオンに対応する音に順番に番号を振ると、«Нополеон»（発音上は /наполеон/）というアナグラムが立ち上がる。

タイトル：

После**дн**ее **но**во**с**е**лье** →　Нополеон　/наполеон/
3 4　　8　1 2 7　5 6

興味深いのは、この詩でも、アナグラムを構成する子音字と母音字が右から左へ 1(н)-2(о)、3(п)-4(о) と逆行しながら、語句の先頭から最後に飛びそこからまた逆行しつつ、5(л)-6(е)、7(о)-8(н) と「閉じた円環」を成している点である。この「閉じた円環」は、パリでの復位からセントヘレナへの幽閉、セントヘレナからパリへの亡骸の帰還というナポレオン自身の「閉じた円環」を象徴しているかのようである。

「閉じた円環」との関連で注目すべきは、ナボコフがレールモントフの 1841 年の詩『夢』（Сон）の構造に関して指摘した「閉じたスパイラル」（замкнутая спираль）という概念である。ナボコフは、この作品を「三重の夢」（тройной сон）と呼び、この詩の語り手である 1 人称の私（レールモントフ自身、より正確には主人公）が見る第 1 の夢、その夢の中に現れる瀕死の重傷を負った者が夢見る第 2 の夢、その第 2 の夢の中で見られる若い女性が見る 2 人称の第 3 の夢が、三重構造の「閉じたスパイラル」を成し、読者を第 1 連に連れ戻すとしている [13]。さらに、ナボコフの指摘を受け、

12 *Гаспаров М. Л.* Фоника // Лермонтовская энциклопедия. М., 1981. с. 546.

シュタイン（К. Э. Штайн）とペトレンコ（Д. И. Петренко）は、『夢』の各詩行にレールモントフの名前の子音反復 ЛРМНТВ がアナグラムとして秘められているという[14]。また、ナボコフは、『現代の英雄』でも、5 つの話が 3 人の語り手によって絡み合う構造を「閉じたスパイラル」と捉えている。最初のふたつの話『ベーラ』と『マクシム・マクシームィチ』では、物語の語り手が語り手 1 となり、次に語り手 1 にペチョーリンの話をするマクシム・マクシームィチが語り手 2 となり、さらに語り手 1 と語り手 2 はペチョーリンに会い、ペチョーリンは自分の手記の語り手として語り手 3 になり、こうして次第にペチョーリンは読者に近づいていき、語り手 3 の手記を語り手 1 が出版することによってこのスパイラルが閉じられる[15]。

このように、レールモントフの特に最晩年のいくつかの作品では、アナグラムや「閉じた円環」あるいは「閉じたスパイラル」の構造を見出すことができ、この円環やスパイラルが読者を物語の最初の時空間に連れ戻すのである。

『デーモン』において「疑いの霊」デーモンが永遠の不死の彷徨から逃れられないのと同様に、『タマーラ』においても、「疑いの霊」（дух сомнения）という「閉じた円環」のアナグラムは、デーモンの分身と化した女王タマーラが、旅人への誘惑　→　旅人の死　→　別れの言葉　→　旅人への誘惑という「閉じた円環」から永遠に逃れられないことを暗示している。こうして、『デーモン』のタマーラのその後の姿が『タマーラ』の女王タマーラであることによって、『デーモン』と『タマーラ』も「閉じた円環」をなすことになる。

また同様に注目すべきは、『タマーラ』の全 12 連のうち初稿では 11 の連で、最終稿では 8 つの連で語句が修正・変更されているが、アナグラムを含む第 5 連だけが、初稿・最終稿とも一字一句変更されていないという点である。このことは、第 5 連が最初から完成していたこと、つまり、アナグラムもはじめから組み込まれていたことを示唆している。

3. 3. *Евну́х* の大文字の意味

13 *Набоков В. В.* Предисловие к «Герою нашего времени». СПб., 1993. с. 238-239.
14 *Штайн К. Э., Петренко Д. И.* Лермонтов и Барокко. Ставрополь. 2007. с. 316.
15 *Набоков В. В.* с. 239-240.

また、同様に興味深いのは、*Евну́х* が大文字で書かれている点である。ハーレムの女性たちを監視し、その脱走や逆にハーレム外からの侵入を防ぐ役目の一介の宦官である евнух（または эвнух）をなぜレールモントフはわざわざ大文字で書いたのだろう。『タマーラ』は、オドエフスキー（В. Ф. Одоевский）からレールモントフに贈られた革製のノート（サンクトペテルブルク国立図書館所蔵）に、その直筆の初稿と最終稿が書き記されているが、初稿、最終稿のいずれでも、*Евну́х* と大文字で記されている（『タマーラ』直筆最終稿第 5 連参照）。

ところが、この問題はこれまでの『タマーラ』研究ではまったく見落とされてきた。というのも、レールモントフの全集あるいは選集として最も権威があるとされている 4 つ版、すなわち、エイヘンバウム編集の 5 巻全集（1935 ～ 1937 年）[16]、科学アカデミー版 6 巻選集（編集：ビリチコフ、ゴロデツキー、トマシェフスキー、1954 ～ 1957 年）[17]、科学アカデミー版 4 巻選集改訂第 2 版（編集主幹：マヌイロフ、1979 ～ 1981 年）[18]、詩作品 2 巻全集（編集主幹：アンドレーエフ、1989 年）[19] のうち、エイヘンバウム版を除くいずれにおいても、この語は *евнух* と小文字で表記され、1954 年のアカデミー 6 巻選集以降に出版されたいずれの作品集でも同様に小文字で表されてきたからである（アカデミー版 6 巻選集所収『タマーラ』第 5 連参照）。

『レールモントフ百科辞典』（Лермонтовская энциклопедия）によれば、レールモントフの全作品中で евнух という語が使われているのは一か所だけ [20]、つまりこの『タマーラ』だけである。したがって、レールモントフの他の作品と比較することはできないが、たとえば、『プーシキン言語辞典』（Словарь языка Пушника）によれば、プーシキンは、『バフチサライの泉』（Бахчисарайский фонтан）で 5 回 эвнух を、その他の作品で 11 回 евнух

16 *Лермонтов М. Ю.* Полное собрание сочинений: В 5 т. М.; Л.: Academia, 1935—1937.

17 *Лермонтов М. Ю.* Сочинения: В 6 т. / АН СССР. Ин-т рус. лит. (Пушкин. дом); Ред. Н. Ф. Бельчиков, Б. П. Городецкий, Б. В. Томашевский. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1954—1957.

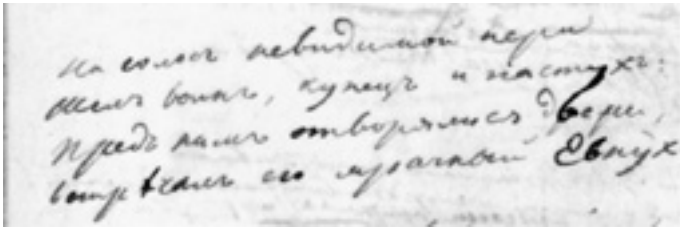
18 *Лермонтов М. Ю.* Собрание сочинений: В 4 т. / АН СССР. Ин-т рус. лит. (Пушкин. дом); Ред. коллегия: В. А. Мануйлов (отв. ред.), В. Э. Вацуро, Т. П. Голованова, Л. Н. Назарова, И. С. Чистова. — Изд. 2-е, испр. и доп. — Л.: Наука. Ленингр. отд-ние, 1979—1981.

19 *Лермонтов М. Ю.* Полное собрание стихотворений: В 2 т. / Гл. ред. Ю. А. Андреев; Вступ. ст. Д. В. Максимова; Сост., подгот. текста и примеч. Э. Э. Найдича. — Л.: Сов. писатель. Ленингр. отд-ние, 1989. — (Б-ка поэта. Большая сер.: 3-е изд.).

20 Лермонтовская энциклопедия. М., 1981. С. 728.

を、合計 16 回この語を使っているが、文頭以外ではいずれも小文字で表記している[21]。とすれば、レールモントフがハーレムの宦官をわざわざ大文字の *Евнух* で記したのには何らかの理由があると考えられる。ここで注目すべきは、『タマーラ』と深い内的関連をもつ『デーモン』でデーモン（демон）がどう表記されているかである。『デーモン』の第 6 稿の作者直筆原稿は残されていないが、作者が正式に承認した写し（авторизованный список）が現存し、その第 6 稿では、デーモンは本文中全 6 回ともすべて大文字の *Демон* で表記されている。このことから、мрачный Евну́х（陰鬱なりし宦官）は、同じく大文字で表される Демон そのものであると推測することができる。しかし、女王タマーラに仕える宦官 Евнух とグダールの娘タマーラを死に追いやった Демон は、一見すると、まったく正反対の存在のように見える。だが、Демон のタマーラに対する次のような言葉、「オレはお前の奴隷だ、お前を愛している！」（Я раб твой, — я тебя люблю!）や「オレはお前の足元に自分の権威を返上したのだ」（Я власть у ног твоих сложил.）などは、タマーラへの隷属を誓ったものである。とすれば、タマーラに隷属することを誓ったデーモンが、その後旅人を誘惑しては死に至らしめるタマーラのために宦官となって仕えるのは、むしろ自然なことと言えるだろう。

『タマーラ』直筆最終稿第 5 連（サンクトペテルブルク・ロシア国立図書館所蔵）

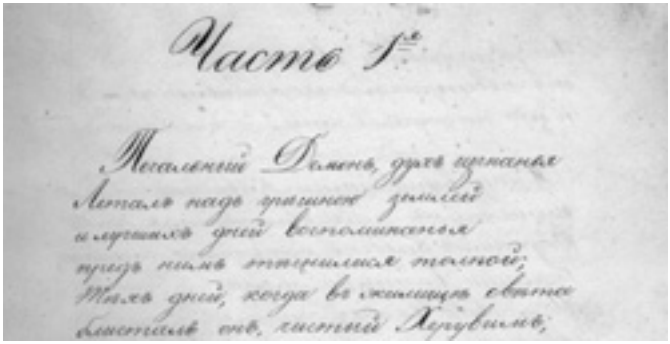


21 Словарь языка Пушкина. М., 1956. с. 747.

アカデミー版 6 巻選集（1954 年）所収『タマーラ』第 5 連

На голос невидимой пери
Шел воин, купец и пастух;
Пред ним отворялися двери,
Встречал его мрачный евну́х.

『デーモン』第 6 稿冒頭（サンクトペテルブルク・ロシア国立図書館所蔵）


Часть 1е

Мечтательный Демон, дух изгнанья
Летал над грешной землей
и лучших дней воспоминанья
пред ним теснилися толпой;
Тех дней, когда в эдеме вечном
блистал он, лучший Херувим,

もうひとつ注目すべきは、レールモントフ自身によって *Евну́х* と у にアクセントが打たれている点である。евнух には 2 通りのアクセント、つまり、е́внух と евну́х があるので、散文の場合にはアクセントが打たれていないとどちらで発音すべきか判断できない。しかし、音節アクセント詩法によるロシア詩では、とりわけ脚韻を踏む詩行末の語ではアクセントが打たれていなくてもその位置を容易に判断できる。現に、4 脚ヤンブの男女交差脚韻で書かれたプーシキンの『バフチサライの泉』では、宦官（эвнух）は 5 回使われ、そのうち 1 回は文頭で大文字だが、残り 4 回は詩行末に置かれ、いずれもアクセントは打たれていないが、эвну́х と発音されることは容易に分かる。以下、アクセントのない音節は U、アクセントのある音節は _ で示す。

Меж ними ходит злой эвнух, U _ | U _ | U _ | U _
若妻たちの間を見回るは悪しき宦官

『タマーラ』は、全 12 連から成る 3 脚アンフィブラーヒィの女男交差韻できわめて厳格に書かれている、つまり、奇数詩行は女性韻、偶数詩行は男性韻をとる。第 5 連では、第 2 詩行末が пасту́х と男性韻の脚韻を踏むのに合わせ、第 4 詩行末も当然 Евну́х と語尾にアクセントが置かれて読まれるはずであり、したがって、わざわざ語尾にアクセントを打つ必要はない[22]。アクセントを打ったのは、『デーモン』で天使がデーモンに放つ言葉 *мрачный дух* を連想させるためではないだろうか。というのは、『デーモン』は基本的に 4 脚ヤンブで書かれており、自立語である дух にアクセントが置かれるからである。ここで、天使の言葉の詩行のそれぞれの語にアクセントを打ち、アクセントのない音節を U、アクセントのある音節を _ で示すなら『デーモン』の一節は次のように表記される。

Исче́зни, мра́чный ду́х сомне́нья! U_ | U_ | U_ | U_U
消え失せよ、陰鬱なりし疑いの霊よ！

このように、レールモントフは『デーモン』中の ду́х と韻を踏むように『タマーラ』で Евну́х と記すことによって『デーモン』のこの一節を読者に連想させようとしたのではないだろうか。

以上から、『タマーラ』は『デーモン』と「陰鬱なりし疑いの霊」で深く結びつけられており、『タマーラ』の女王タマーラは、『デーモン』でデーモンの口づけによって落命したタマーラ妃のその後の姿であると考えることができる。

こうして、『デーモン』と『タマーラ』は閉じた円環をなし、また、この世とあの世を結ぶテレク川という共通の境界トポスのイメージで結びつけられた『デーモン』、『テレクの貢物』、『タマーラ』の 3 作品も全体で閉

22『タマーラ』の第 6 連の *жемчу́г*（真珠）にもレールモントフ自身によってアクセントが打たれている。この語も 19 世紀までは же́мчуг と жемчу́г の二通りのアクセントがあったが、『タマーラ』第 6 連では、この語は詩行末ではなく、詩行の途中に置かれているので、紛らわしさを避けるためにアクセントが打たれたのだろう。

じた円環をなすことになる。それぞれ、舞台の場、主役、助演をなすこれらの連作は、前述のように、詩作法から見ると、基本的に弱強格の 4 脚ヤンブの女男交差脚韻で書かれる『デーモン』に対し、正反対のイメージの『テレク川の貢物』は強弱格の 4 脚ホレイの女男交差脚韻、一方『タマーラ』は弱強弱格の 3 脚アンフィブラーヒィの女男交差脚韻と、いずれも女男交差脚韻をとりながら、それぞれ異なるリズム形式を与えられている。

ところで、『デーモン』において天使がデーモンに投げ放つ「消え去れ、陰鬱なりし疑いの霊よ」の言葉は第 1 稿から第 6 稿まではなく、最終稿と言われる第 8 稿で追加されたものだが、『タマーラ』の女王タマーラの生前であった『デーモン』のタマーラ妃は、この第 8 稿のタマーラではない。なぜなら，第 8 稿のタマーラは、天使によって天国に運ばれ、その魂がすでに救われているからであり、その後の姿はあり得ないからである。とすると、この『デーモン』のタマーラは，第 6 稿のタマーラ、すなわち、デーモンの「口づけによって」その悪しき魂の刻印が押されたまま、天使を追い払ったデーモンが住む地獄に存在し続けるタマーラということになるだろう。では、なぜレールモントフは第 6 稿のタマーラのその後の姿を描いたのだろうか。以下、第 6 稿と第 8 稿を比較しながら、この問題について考察してみよう。

4.『デーモン』の第 6 稿と第 8 稿の違い

現在一般的に受け入れられている『デーモン』の稿本の分類は、アカデミー版 6 巻選集（1954 ～ 1957 年）が特定した 8 つの稿本にもとづき、その執筆時期をエリック・ナイディッチ（Найдич Э. Э.）がアカデミー版 4 巻選集改訂第 2 版（1979 ～ 1981 年）で修正したものである。すなわち、初稿（1829 年）、第 2 稿（1830 年はじめ）、第 3 稿（1831 年）、第 4 稿（7 連だけの断章、1831 年）、第 5 稿（1833 ～ 1834 年）、第 6 稿（1838 年 9 月 8 日付）、第 7 稿（1838 年 12 月 4 日付け）、最終稿の第 8 稿（1839 年 2 月以前と推定）の合計 8 つである[23]。ナイディッチによると、すでに第 6 稿の写しによってペテルブルクの貴族の間で広く知られていたこの作品を

23 *Лермонтов М. Ю.* Собрание сочинений: В 4 т.

皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ（Александра Федоровна）が読みたいという要望を受けてレールモントフが書き直した原稿が第 7 稿であり、さらに検閲を考慮して第 7 稿に修正・削除を施した原稿が第 8 稿である。この第 8 稿の直筆原稿を筆耕に書写させた写しが宮廷に提出された。これがいわゆる宮廷写本（придворная копия）である。レールモントフの親戚で宮廷に近い人物だったアレクセイ・フィロソーフォフ（Философов А. И.）は、1841 年にレールモントフ直筆の第 8 稿の原稿から写しをとり、それをもとに、作者の死後、1856 年にドイツのカールスルーエで 28 部という小部数で、はじめてロシア語版の『デーモン』が印刷された[24]。それ以降ロシアで出版されている『デーモン』はすべてこの第 8 稿を定本としている。第 7 稿はアカデミー版 6 巻選集でアンナ・ミハイロヴァ（Михайлова А. Н.）が第 8 稿からの復元を試みているが、直筆も作者承認の写しも残されていないために、本論では考察の対象としない。

初稿から第 5 稿まで、デーモンが恋する女性は、名前も付けられていない修道女（монахиня）であった。物語の舞台がカフカスに設定され、テレク川、ダリヤル峡谷、そしてタマーラがはじめて登場するのは、献呈詩を添えてヴァルヴァラ・ロプヒナーに献呈された第 6 稿である。この稿本は、レールモントフが 1837 年にカフカスに追放になり、再びカフカスの自然とフォークロアに触れ新たに書き直したものであるが、それにもかかわらず、初稿から第 6 稿まで（断片的な第 4 稿を除き）、重要な主題、構成、理念は、いずれも以下のように変わることなく一貫している。

(1) タマーラが死ぬと、その魂は地獄に飛び去る。

(2) デーモンは、タマーラの死後駆けつける天使に対し「毒のある微笑で」（初稿）、あるいは「苦き微笑で」（第 2、第 3、第 5、第 6 稿）天使を責めると、天使は飛び去る。こうして、デーモンは天使に勝利しながらも、永遠の孤独から抜け出すことができない。

初稿：

упрекает его язвительной улыбкой　天使を毒のある微笑で責める

24 *Найдич Э. Э.* Спор о «Демоне» // Этюды о Лермонтове. СПб., 1994. с 171-178.

第 2、第 3、第 5、第 6 稿：

Посла потерянного рая	失楽園の使者を
Улыбкой горькой упрекнул...	苦き微笑で責めた .....

(3) いわゆる「神に関する問答」が、修道女と見知らぬ者（デーモン）との間で (第 3 稿､第 5 稿)､あるいはタマーラとデーモンとの間で (第 6 稿) やりとりされ、デーモンは神を冒涜する。

第 6 稿：

Тамара	タマーラ
А Бог?	それでは、神は？
Демон	デーモン
На нас не кинет взгляда;	オレたちなんぞ目もくれないさ；
Он занят небом — не землей!	地上じゃあなく､天上のことでお忙しい！

一方、第 8 稿では、これら (1) から (3) までのすべての主題が以下のように変更されている。

(1) 天使がタマーラの魂を天国に連れ行き、救う。

(2) 天使はデーモンに消え去れと言い放ち、デーモンに厳しい眼差しを向けるなり飛び去る。デーモンは一人取り残される。つまり、第 6 稿までとは反対に､第 8 稿では､天使がデーモンを突き放し､デーモンが敗北する。

第 8 稿：

Летел на крыльях золотых,	黄金の翼羽ばたかせ飛び来たり
И душу грешную от мира	運び去る罪なる心をこの世から
Он нес в объятиях своих.	己の翼で抱きかかえ。
И сладкой речью упованья	甘き希望の言葉もて
Ее сомненья разгонял,	乙女の疑念追い払う
(...)	
Исчезни, мрачный дух сомненья!	消え失せよ､陰鬱なりし疑いの霊よ！
(...)	
И Ангел строгими очами	すると天使は厳しき眼で

На искусителя взглянул	悪魔を見据え
И, радостно взмахнув крылами,	喜ばしげに羽ばたくと
В сиянье неба потонул.	天の光へ消え去った。
И проклял Демон побежденный	打ち負かされたデーモンは呪うのだった
Мечты безумные свои,	自らの狂気の夢を。
И вновь остался он, надменный,	そして再び取り残された、傲慢なまま、
Один, как прежде, во вселенной	昔のように、宇宙にひとり、
Без упованья и любви!..	希望も愛もなきままに！ .....

(3)「神に関するタマーラとデーモンの問答」は削除され、その一方、いわゆる「デーモンの誓い」(Клятва Демона) と「神との和解」(Примирение с Богом) が加筆され、ここでデーモンは、神への復讐心を断ち切り、天との和解を渇望し善を希求する。20 詩行にわたり *Клянусь*（誓おう）という語が 10 回も繰り返され、古き復讐の心、傲慢な思いと絶縁したことが宣言される。

第 8 稿：

Клянусь я первым днем творенья,	創造の第一日にかけて誓おう
Клянусь его последним днем,	創造の最終の日にかけて誓おう、
Клянусь позором преступленья	罪というこの屈辱にかけて誓おう、
И вечной правды торжеством.	また永遠の真理の勝利にかけて誓おう。
(...)	
Я отрекся от старой мести,	このオレが古き復讐の思いを断ち、
Я отрекся от гордых дум;	傲慢な幾多の思いを断ったことを。
(...)	
Хочу я с небом примириться,	オレは天との和解がしたい、
Хочу любить, хочу молиться,	愛や祈りがしてみたい、
Хочу я веровать добру.	善を信じてみたいのだ。

(4) さらに、第 6 稿では、タマーラの死後、タマーラと父親のグダール

の亡骸は朽ち果て、その場には吹雪だけが舞うのに対し、第 8 稿では彼らが葬られた教会が聖なる力に守られる。

第 6 稿：

И там, где кости их истлели,	彼らの骨が朽ち果てしその場所に、
На рубеже зубчатых льдов,	ギザギザの氷が刻むその場所に、
Гуляют ныне лишь метели	舞うは今では吹雪だけ
Да стаи вольных облаков;	漂うは気まぐれなりし雲の群れだけ

第 8 稿：

Но церковь на крутой вершине,	彼らの骨が大地によって引き受けられた
Где взяты кости их землей,	その教会は佇んでいる険しき峰に、
Хранима властию святой,	聖なる力に守られながら

このような第 6 稿と第 8 稿の内容の大きな違いは何に起因するのか、第 8 稿でなぜこれほど大きな変更をレールモントフが行ったのかについては、検閲を考慮したための妥協とする説と内容の必然的深化とする説があり、さらに定本として、ロプヒナーに献呈した第 6 稿をとるべきか、最終稿の第 8 稿をとるべきかという論争が起こった。タチヤーナ・イヴァノヴァ (Иванова Т. А.)[25] のように検閲説に依って第 6 稿をとる研究者がいる一方、エイヘンバウム[26] やナイディッチ[27] のように、一部検閲説をとりながら、最終稿を支持する学者もいる。また、内容の深化説から第 8 稿を主張するアレクサンドル・ドクーソフ（Докусов А. М.）[28] のような研究者もいて、複雑な様相を呈しているが、現在ロシアで出版されている『デーモン』は、アカデミー版に依拠しているために、いずれも最終稿の第 8 稿を定本としている。

ここで注目すべきは、第 6 稿（1838 年 9 月 8 日）から第 8 稿（1839 年

25 *Иванова Т. А.* Посмертная судьба поэта. М., 1967. с. 200-202.

26 *Эйхенбаум Б. М.* Комментарий к «Демону». *Лермонтов М. Ю.* Полное собрание сочинений: В 5 т. М.; Л.: Academia, 1935—1937. с. 628-635.

27 *Найдич Э. Э.* Последняя редакция «Демона» // Русская литература. 1971. №1. с. 72-78.

28 *Докусов А. М.* Поэма М. Ю. Лермонтова «Демон» (К вопросу об идейной концепции и основном тексте поэмы) // Русская литература. 1964. №4. с. 111-129.

2 月以前）までの執筆期間がわずかに 5 か月間であったという事実である。なぜこれほどの短期間に第 7 稿も含め 3 つもの稿本を執筆したのであろうか。この点を明らかにするために、以下、第 6 稿から第 8 稿への執筆の経緯と検閲との関係を追ってみよう。

5.『デーモン』の第 6 稿から第 8 稿への執筆経緯

レールモントフは､1837 年のカフカスへの追放中に第 6 稿に取りかかり、翌年 1838 年 9 月 8 日にこの稿を脱稿する。1834 年の第 5 稿以来 4 年ぶりの改稿であり、第 6 稿では、カフカスでの経験が大きく反映され、舞台がカフカスに、主人公の修道女がタマーラに代わる。

ナイディッチは、『デーモン』がペテルブルクで知られるようになったのは、1838 年 10 月 29 日、カラムジン家のサロンでレールモントフ自身の朗読が大成功を収めてからであるとしている[29]。この日付から判断して、そこで朗読された稿本は 1838 年 9 月 8 日に脱稿し、献詩を添えてヴァルヴァラ・ロプヒナーに献呈された第 6 稿に間違いない。この第 6 稿の評判は口伝えで広まり、レールモントフは、友人たちにこの原稿を見せたり、貸し与えたりしている。こうして第 6 稿の写しは、検閲を通すことなく、ペテルブルク中に広まった。このことは、レールモントフ自身が、この第 6 稿が検閲を通らないと考えていたことを示唆するものである。

ところが、その後、作家自身予期せぬことに、帝室のある人物（皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ）が、すでに写しによって評判になっていた『デーモン』を読みたいと所望されているという知らせ受ける。これについて、レールモントフの親戚で友人のアキム・シャン＝ギレイ（Шан-Гирей А. П.）が証言を残している。シャン＝ギレイは、1834 年からペテルブルクでレールモントフと同じ部屋に同居し、作家の口述筆記を行なっては、筆記されたものについて作家と検討する間柄だった[30]。「帝室のある人物が、当時大なり小なり不正確に写筆された写しによって広まってい

29 *Найдич* Э. Э. Спор о «Демоне». с. 175.
30 Там же. с. 174.

た『デーモン』を読みたいと所望された。レールモントフは、この物語詩に取り組むこと4度目となり、それを仕上げると、筆耕に渡した[31]」。4度目ということは、それ以前に3回執筆していることになり、それぞれどの稿を指しているのかは不明だが、ここで注目すべきは、帝室のある人物からの依頼があったために、レールモントフがそれ以前の原稿を手直ししたことが当たり前のように記されている点である。これに関して、ナイディッチは、皇后アレクサンドラ・フョードロヴナが『デーモン』に興味を示したことをレールモントフは1838年11月に知り、皇室の意見が自分の作品の運命、つまり、印刷の可能性を左右することをもちろん理解していたために、もともと自分の原稿を書き直すのをひどく嫌っていたにもかかわらず、再びこの作品を見直し、新たに手を入れたとしている[32]。つまり、レールモントフ自身、もともとの第6稿のままでは印刷されないことを理解していたために、新たに手を入れ1838年12月4日に仕上げたということになる。ナイディッチは、この第7稿を筆耕に渡す前にレールモントフが、おそらく、友人たちの助言を受けて、さらに新たな修正を加え、第7稿からわずか2か月後の1839年2月以前に脱稿したものが第8稿であり、この第8稿が宮廷の朗読会で朗読されたとしている[33]。以上から、第8稿は、宮廷での朗読というチャンスを活かし、検閲の許可を得て世に出版することを目的に、第6稿の脱稿からわずか5か月という短期間で改変され完成したものであると推論することができる。

レールモントフは、直筆原稿の他に、宮廷提出用にこの直筆原稿から筆耕に写しを作らせた。直筆原稿は、シャン＝ギレイからストルイピンを経てフィロソーフォフに渡った。清書された書写は、宮廷から返却された後シャン＝ギレイからアロペウス、オブーホフを経由して原稿の一大収集家であるオスカル・クヴィスト（Квист О. И.）のものとなった。ここで重要なのは、クヴィストに渡った書写には「神に関するタマーラとデーモンの問答」が含まれていないことである。これは、レールモントフが自ら、宮廷提出用原稿からこの「問答」を削除したことを意味している。一方、フィロソーフォフの手もとに残った直筆原稿にはこの「問答」が含まれて

31 М. Ю. Лермонтов в воспоминаниях современников. М., 1972. с. 44.
32 *Найдич Э. Э.* Спор о «Демоне». с. 175.
33 Там же. с. 177.

いた。これは、レールモントフ自身が、本来、この「問答」がこの作品にとって不可欠であると判断していたことを示唆している。フィロソーフォフは、この直筆原稿から 1841 年に写しをとり、それをもとに、作者の死後、1856 年にドイツのカールスルーエではじめてロシア語版の『デーモン』が印刷されたが、検閲への配慮から「問答」は入れられなかった。このことは、1970 年に科学アカデミーの古文書館のブィチコフ（Бычков А Ф.）フォンドから発見されたフィロソーフォフの手紙の全文から明らかになった。その手紙は、フィロソーフォフがペテルブルクの公立図書館の館長だったモデスト・コルフ（Корф М. А.）に宛てた 1856 年 12 月 11 日（新暦 23 日）付けの手紙で、ここには、(1) 1856 年のカールスルーエ版のもとになったのは、レールモントフの直筆原稿から、1841 年にフィロソーフォフ自身が、そのすべての抹消箇所や変更箇所を含め、入念に直筆原稿と照合し、レールモントフの常に正しいとは限らない正書法さえ正確に写し取ったものであること、(2) 直筆原稿は紛失しておそらく火事で燃えてしまったこと、(3) コルフに対し「今後宗教検閲が弱まって、あなたの手もとにあるままの原稿の形で、つまり、デーモンとタマーラの問答を削除しない形で、この作品を印刷できるようになるかもしれない」というフィロソーフォフの希望的見通しが述べられていることが明らかになった[34]。この宗教検閲のくだりが意味するところは、「神に関するタマーラとデーモンの問答」は 1856 年のカールスルーエ版では削除されたが、検閲が許せば、この「問答」をレールモントフの遺志に従って本来の形で復活させて出版すべきであるとフィロソーフォフが考えていたということである。一方、ナイディッチは、この手紙の全文を引用しながらも、第 8 稿でのデーモンの敗北は、レールモントフの「最後の数年間」の作品に際立っていた絶望と否定というモチーフを強調しただけのことだから、第 8 稿からこの「問答」を削除してもこの物語の全体的な方向性や深淵な哲学的意味が変わるものではないとしている[35]。しかし、第 6 稿から第 8 稿への改変が、わずか 5 か月間でなされたこと、さらにレールモントフがフィロソーフォフに「問答」に関する遺志を託したことを考えるなら、ナイディッチのこの見解は正当性を欠くものと言うべきであろう。

34 Там же. с. 171-173.
35 *Найдич Э. Э.* Последняя редакция «Демона». с. 78.

宮廷に提出された原稿（第 8 稿）の検閲に関し、ヴァディム・ヴァツーロ（Вацуро В. Э.）は、1839 年のペテルブルク検閲委員会目録を調べた結果、第 97 番として、「カラムジン氏」より 3 月 7 日に提出された『デーモン、東方の物語』70 ページが、3 月 10 日ニキテンコ（Никитенко А. В.）による検閲を受け、3 月 11 日にヴラジーミル・カラムジン（Карамзин В. Н.）に返却され、同氏が受け取り署名をしたことを発見した[36]。これによって、宮廷での朗読会のすぐあとに、カラムジンが『デーモン』の最終稿（第 8 稿）を検閲に提出したことが明らかになった。ヴァツーロは、宮廷での朗読用に提出される写しは、国民教育省の検閲を要求されないこと、また、宮廷で朗読されたという事実は、検閲にとって一種の部分的承認であったことから、このような検閲の流れは全く理解できるものであり、この検閲目録の事実や、カラムジンに原稿が返却されたこと、また検閲委員会の記録に禁止の印がないことから、『デーモン』が検閲の承認を受けたと結論付けられること、一方で、このことは、ニキテンコが検閲委員会の審議にかけずに、独断で必要な変更や削除を行ったことを意味するものであるとしているが、カラムジンに返却された検閲済みの原稿をレールモントフは結局印刷しなかった。その考えられる理由としてヴァツーロは、(1) ニキテンコの変更・削除が大量だったこと、(2) 返却された直後の、1839 年 3 月末にベストゥージェフ（Бестужев А. А.）の肖像画事件[37]で検閲の責任をとって皇室官房第三部部長のモルドヴィノフ（Мордвинов А. Н.）が罷免されたことに端を発し、この事件を恐れた検閲官たちが一層検閲を厳しくしたこと、(3) さらに、同年 8 月、宗教的な内容にかかわる作品はその程度の如何にかかわらず、すべて宗教検閲を受けなければならないという国民教育省大臣の命令が下されたことなどを挙げている[38]。

このような状況下で、いったん個人的な検閲の承認を得ていた『デーモン』は、再び検閲を受けなければならなくなり、出版を許可される可能性

36 *Вацуро В. Э.* К цензурной истории «Демона» // М. Ю. Лермонтов. Исследования и материалы. Л., 1979. с. 411.

37 1839 年に出版された『ロシアの 100 名の文士』（Сто русских литераторов）に、それまでマルリンスキー（Марлинский）のペンネームで執筆していたデカブリストで、この本の出版の前に亡くなったベストゥージェフ（Бестужев А. А.）が本名のまま肖像画付きで作品が掲載されたため、検閲の責任をとって皇室官房第三部部長のモルドヴィノヴが罷免された。

38 *Вацуро В. Э.* с. 412-413.

はきわめて小さかった。そこで、レールモントフは、『デーモン』の原稿（第8稿）をさまざまな人たちに貸し与えた。ジュコフスキー（Жуковский В. А.）も、1839年10月24日の日記に、ヴィエリゴルスキーからペテルブルクへの列車内で『デーモン』を読んだと記している[39]。また、レールモントフの伝記作家ゾートフ（Зотов В. Р.）は1863年に発表した回想の中で、『デーモン』がカールスルーエではじめて出版される前から、1840年代にはすでに広く知られていたことを証言している。「我々は皆、約20年前、我々がまだ若かった頃、この物語詩がどれほど巨大で強烈な印象を与えたかいまだに覚えている。ロシア中がこの詩を諳んじていた[40]」。このことは、すでに1840年代にいかに写しが広まっていたかを物語っている。

以上から、レールモントフは、検閲のむずかしさから第8稿の出版すら急ぐのを止め、その一方で、この物語詩を広めるためにあえて第8稿の原稿を読み聴かせ、貸し与えては写しをとらせていたと推測される。当時の検閲への対抗措置として、作家たちが自作の写しを秘密裏に回覧することはごく一般的に行われていたことだった。

以上のレールモントフの生前の検閲にまつわる事情、出版が許されない状況を考え合わせると以下の結論を導き出すことができよう。

(1) レールモントフは、改変した『デーモン』の第8稿すら出版できない状況から、『デーモン』の第6稿の続編としてバラード『タマーラ』を書き、地獄に落ちたタマーラのその後の姿を、同じ名前を与えた女王に託した。こうしてデーモンの分身と化した女王の姿を描いた。

(2) したがって、グルジアの伝説に基づいて書かれたレールモントフのバラード詩『タマーラ』の主人公タマーラは、グルジアの伝説上の人物ではなく、レールモントフの物語詩『デーモン』のタマーラその人である。

(3)『タマーラ』の女王タマーラは、定本とされる『デーモン』第8稿のタマーラではない。なぜなら、第8稿ではタマーラの魂は天使によって天国に導かれ、すでに救われているからである。レールモントフが描きたかったのは、『デーモン』第6稿でデーモンの悪しき心が封印されたまま、

39 *Жуковский В. А.* Дневники. СПб., 1903, стр. 508.
40 *Зотов В. Р.* «Демон», поэма Лермонтова // Северное сияние. Т. 2, СПб., 1863. с. 92.

その魂が救われることなく地獄に行ったタマーラのその後の姿、あの世で復活したタマーラの姿であり、あの世から旅人たちを呼び招き、その亡骸をテレク川に捨てるタマーラであった。

(4) レールモントフは、『デーモン』第 6 稿のタマーラのその後の姿を『タマーラ』の女王タマーラとすることによって、このふたつの作品を「閉じた円環」とした。

(5) 写しによって広く知られていた『デーモン』第 8 稿の中の最も印象的な天使の言葉「陰鬱なりし疑いの霊よ」(мрачный дух сомненья) を『タマーラ』の第 5 連にアナグラムとして忍ばせ、女王タマーラに仕える宦官である Евнух を、公女タマーラの僕となった Демон の分身として、同じ大文字で記すことによって、読者にふたつの作品の関連性を暗示した。

(6) 死者たちをあの世へと押し流すテレク川は、この世とあの世の境界をなすトポスである。ここに、『デーモン』、『テレクの貢物』、『タマーラ』の後期 3 作品は、テレク川という共通のテーマをもち、それぞれ舞台の場、主役、助演という関係からなる連作として、つまり、「閉じた円環」として完結した。

Список литературы

1. *Андроников И. Л.* Лермонтов в Грузии в 1837 году. М., 1955.
2. *Вацуро В. Э.* К цензурной истории «Демона» // М. Ю. Лермонтов. Исследования и материалы. Л., 1979. с. 410-414.
3. *Гаспаров М. Л.* Метр и смысл. Ульяновск. Фортуна ЭЛ., 2012.
4. *Григорьев В. П., Колодяжная Л. И., Шестакова Л. Л.* Собственное имя в русской поэзии XX века. М., 2005.
5. *Докусов А. М.* Поэма М. Ю. Лермонтова «Демон» (К вопросу об идейной концепции и основном тексте поэмы) // Русская литература. 1964. №4. с. 111-129.
6. *Жуковский В. А.* Дневники. СПб., 1903.
7. *Зотов В. Р.* «Демон», поэма Лермонтова // Северное сияние. Т. 2, СПб., 1863.
8. *Иванова Т. А.* Посмертная судьба поэта. М., 1967.
9. *Квятковский А. П.* Поэтический словарь. Изд. 3-е, испр. и доп. М., 2013.

10. *Лермонтов М. Ю.* Полное собрание сочинений: В 5 т., М.; Л.: Academia, 1935—1937. Т. 3. Поэмы и повести в стихах. — 1935.
11. *Лермонтов М. Ю.* Сочинения: В 6 т. / АН СССР. Ин-т рус. лит. (Пушкин. дом); Ред. Н. Ф. Бельчиков, Б. П. Городецкий, Б. В. Томашевский. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1954—1957.
12. *Лермонтов М. Ю.* Собрание сочинений: В 4 т. / АН СССР. Ин-т рус. лит. (Пушкин. дом); Ред. коллегия: В. А. Мануйлов (отв. ред.), В. Э. Вацуро, Т. П. Голованова, Л. Н. Назарова, И. С. Чистова. — Изд. 2-е, испр. и доп. — Л.: Наука. Ленингр. отд-ние, 1979—1981.
13. *Лермонтов М. Ю.* Полное собрание стихотворений: В 2 т. / Гл. ред. Ю. А. Андреев; Вступ. ст. Д. В. Максимова; Сост., подгот. текста и примеч. Э. Э. Найдича. — Л.: Сов. писатель. Ленингр. отд-ние, 1989. — (Б-ка поэта. Большая сер.: 3-е изд.).
14. Лермонтовская энциклопедия. М., 1981.
15. *Лотман Ю. М.* Культура и взрыв // Семиосфера. СПб., 2000. С. 12-149.
16. *Мельницкий В. П.* Переезды по России в 1852 году. Статья 3 // Современник. 1853, №8, отд. IV. С. 135-169.
17. М. Ю. Лермонтов в воспоминаниях современников. М., 1972.
18. *Набоков В. В.* Предисловие к «Герою нашего времени». СПб., 1993.
19. *Найдич Э. Э.* Последняя редакция «Демона» // Русская литература. 1971. №1. с. 72-78.
20. *Найдич Э. Э.* Спор о «Демоне» // Найдич Э. Этюды о Лермонтове. — СПб., 1994. С. 164-189.
21. Пушкин А. С. Собрание сочинений в 10 т., т. 5, М., 1956-1962.
22. *Роднянская И. Б.* «Демон» как художественное целое // Лермонтовская энциклопедия. М., 1981. С. 132-137.
23. Славянская мифология: энциклопедический словарь. М., 1995.
Словарь языка Пушкина. М., 1956.
24. *Штайн К. Э., Петренко Д. И.* Лермонтов и Барокко. Ставрополь. 2007.
25. *Шувалов С. В.* Мастерство Лемонтова // Жизнь и творчество М. Ю. Лермонтова. Сборник 1. М., 1941. С. 251-309.